

## 第2章-5. 中国の思想

### 1. 儒家思想

中国には、紀元前1500年ころにまでさかのぼるとされると思われる文字記録が残されており、その中に、家族・血縁集団の道徳や、道徳に基づく政治に関する伝承が含まれている。春秋戦国時代の孔子は、儒教思想をゼロから作り上げたのではない。むしろ孔子は、時代の変わり目において、こうした伝統的道徳を守ろうとした人であった。

◎ 孔子 (551 ~ 479.BC) ……言行録『論語』(弟子たちとの問答を記す)

周代の文化的な秩序のしくみ(=礼楽)の復活をめざす

- 「仁」……根本道徳  
親子の愛(孝)、兄弟の愛(悌)などの家族道徳を基本とする、人を愛し、他人の身になって考える思いやりの心。
- 「忠」…自分を欺かないこと(口と心の一致)。
- 「恕」…自分が願うことを他人に及ぼすこと。(心の如し)
- 「礼」…「仁」の実践される形式=社会的な儀礼  
自分の欲望(己)に打ちかち、礼にしたがう=克己復礼

仁を実践する人=君子(その中でも最高の人格者=聖人)

⇔ うわべだけで、誠意のない人=小人

※「論語」の有名な文句

「<sup>すなは</sup>学<sup>くら</sup>びて思<sup>ち</sup>はざれば則<sup>あやふ</sup>ち<sup>すなは</sup>罔<sup>あやふ</sup>し。…知識を学んだだけで自分でかんがえないのは愚かである。思<sup>すなは</sup>ひて学<sup>あやふ</sup>ばざれば則<sup>あやふ</sup>ち<sup>すなは</sup>殆<sup>あやふ</sup>し。…知識がないまま自分勝手に考えるのは危険である。」

「学<sup>あやふ</sup>びて時<sup>あやふ</sup>にこれ<sup>あやふ</sup>を習<sup>あやふ</sup>ふ。またよろこばしからずや。朋<sup>あやふ</sup>の遠<sup>あやふ</sup>方<sup>あやふ</sup>より来<sup>あやふ</sup>るあり、また楽<sup>あやふ</sup>しからずや。人<sup>あやふ</sup>知<sup>あやふ</sup>らずして、慍<sup>あやふ</sup>(うら)みず。また君子<sup>あやふ</sup>ならずや。」

学問の楽しさは、先生から習ったことを時々復習してみたり、同好の友人と語り合ったりして、新しい発見があることだ。また学問をするのは、他人に認められようとしてではない、という気持ちを持つ人が君子なのだ。

「故<sup>あやふ</sup>きを温<sup>あやふ</sup>めて新<sup>あやふ</sup>しき<sup>あやふ</sup>を知る。もって師<sup>あやふ</sup>たるべし。」

過去の伝統的知識の中から、現代にも通ずる新しい意味を知る。

それができるのが「先生」と呼ばれる人だ。

「これを知るは知るとなし、知らざれば知らずとなす。これ知るなり。」

(≒ソクラテス「無知の知」)

「君子<sup>あやふ</sup>は和<sup>あやふ</sup>して同<sup>あやふ</sup>ぜず。小人<sup>あやふ</sup>は同<sup>あやふ</sup>じて和<sup>あやふ</sup>せず」 (同≒大衆、和≒公衆)

「己<sup>あやふ</sup>の欲<sup>あやふ</sup>せざる所<sup>あやふ</sup>は人<sup>あやふ</sup>に施<sup>あやふ</sup>すなかれ」 (≒キリスト教の黄金律、→J.S.ミル)

◎ 孟子 (372 ~ 289.BC)

「仁」に「義」を加え「仁義」を説く。(仁=愛、義=誠)

各国君主に、仁義による政治 (王道) を説く = 徳治主義

⇔ 武力で抑圧する政治 (霸道) を批判

↓

▶ 易姓革命 …… 民衆を苦しめる暴君は倒され、別な王に代わられて当然  
(王家の姓が変わること)

▶ 性善説 …… 人はみな生まれながらに「仁のもと」を持っている  
『孟子』(孟子の言行・問答を編集した書)「公孫丑章句上」より

孟子曰く、人皆、人に忍びざるの心有り。…… (中略)  
是によりて之を見れば惻隱の心無きは人に非ざるなり。…… (中略)  
惻隱の心は仁の端なり。羞惡の心は義の端なり。  
辞讓の心は礼の端なり。是非の心は智の端なり。  
人のこの四端有るや、なおその四体有るがごときなり。

四端 …… 惻隱 ・ 羞惡 ・ 辞讓 ・ 是非  
↓ ↓ ↓ ↓  
四徳 …… 仁 ・ 義 ・ 礼 ・ 智

四徳が身体に満ちあふれた状態 = 浩然の気

→ そのような状態の人を 大丈夫 という

※ 五倫 …… 父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信

※ 五常 …… 仁・義・礼・智・信 (漢代に 董仲舒 が四徳に信を加えた)

◎ 荀子 (298 ~ 235.BC)

▶ 性悪説 …… 「人の性は悪なり。その善なるは偽なり」  
生まれながらの善人はいない。

人は、生まれたあとに「礼」を修得し善人になる (礼治主義)。

※ 結局、生後の教育が大切という点では孟子も荀子も同じ。

しかし、荀子の弟子は、儒家から離れ、法家 に分類される

< 法家 >

↓

◎ 韓非子 (? ~ 233.BC) …… 法治主義

「法こそが王道政治の根本であり、刑こそは (王の民に対する) 愛のはじめである。」

秦王政 (始皇帝) に仕えるが、同門の李斯の讒言で獄死

## 2. その後の儒教史

- ◆ 前漢……董仲舒により国教となる 修身・齐家・治国・平天下  
政治の実態は法治主義 ⇔ タテマエとしての徳治主義  
正しいテキストの理解を図る「訓詁学」が後漢期にかけてさかんに
- ◆ 魏晋南北朝……道教・仏教におされて衰退
- ◆ 唐……科挙の試験科目になる→再び「訓詁学」がさかんに 孔穎達「五経正義」
- ◆ 宋……北方異民族に国を脅かされる中で、中国人としての思想に目覚める。  
仏教（禅宗）の影響で、自然と人間の本性の関係について考察 = 宋学

◎ 朱熹 (1130 ~ 1200) …… 朱子学 を大成する。

「五経」(詩経・書経・易経・春秋・礼記、=古典) よりも  
「四書」(大学・中庸・論語・孟子、=思想書) を重視

①. 政治思想として

- ・ 大義名分論 (君臣の義)
- ・ 華夷の別 (中華思想、周辺異民族の蔑視、尊王攘夷)

②. インド思想的な自然観と人間観が導入される。(性理学)

- ▶ 性即理 ……天の「理」と、人の「性」は一体のものである。
- ▶ 理気二元論 ……心の中では「気 (=欲望)」が「性」を圧迫している。  
→ よって、「性」を鍛えて気を制御する必要がある。
  - ▶ 居敬 ……雑念を払って欲望を制御する (= 持敬)
  - ▶ 窮理 ……勉強によって真理を究める (= 格物致知)

→ 主知主義 (学問重視) = 科挙制度の理論的裏付け

↓

宋の陸九淵

↓

◆ 明

◎ 王陽明 (1472 ~ 1528) …… 陽明学 を大成

- ▶ 心即理 ……心のあり方全体が「理」と一体である (理一元論)  
「心が善か悪か」という議論自体が性善説を否定するもの、と批判。
- ▶ 致良知 ……先天的な道德知 (良知) の実践を重視  
= 知行合一 (知と行動の一貫性)

### 3. その他の諸子百家

実際に、団体を組織して活動していたのは儒家と墨家のみ

#### <道家>

##### ◎ 老子 (生没年不詳)

- ▶ 道 (タオ) ……人智の計らいを超えた絶対的宇宙の原理  
儒家を批判……「大道廢れて仁義あり。智慧出でて大偽あり。  
六親和せずして孝慈あり。国家昏乱して忠臣あり。」
- ▶ 無為自然 ……あるがままに生きよ  
政治も「無為」。そのためには「小国寡民」(小さな自給自足の共同体  
にゆうじやくけんげ)
- ▶ 柔弱謙下 ……柔弱に他者と争わずに生きる
- ▶ 上善如水……「道」に近いものは「水」  
万物に利益を与え、争わずに自然に従い流れる

##### ◎ 荘子 (BC.4c.)

- ▶ 万物斉同 ……全ての生物はありのままに生活している、という点で同じ
- ▶ 真人 ……そのように生きる理想的な人間  
逍遙遊 (俗世間から離れて暮らす)、心齋・坐忘 (心を無にして道と一体化)

→ 南北朝時代に民間信仰と融合し「道教」が成立 (寇謙之による)

#### <墨家> …… 墨子 (480-390.BC)

兼愛 (無差別の愛 ⇔ 仁は差別に基づく愛)、節葬 (簡素な葬式 ⇔ 礼楽を批判)  
交利 (利の相互付与)、非攻 (侵略戦争否定)

墨家集団は、優れた防御技術を備えた部隊として小国の防御にあたった。

#### <陰陽家> ……陰陽五行説

万物は、5つの基本元素 = 五行 (木火土金水) とプラス・マイナス (陰陽)  
によって成り立っている。 → 古代ギリシアの自然哲学に匹敵

⇔ しかし、呪術的な方向へ向かい、自然科学には発展せず

※風水とも関連……方位の吉凶判断、青龍(東)、朱雀(南)、白虎(西)、玄武(北)

#### <兵家> ……孫武 (孫子、BC.500頃)

「彼を知り己を知らば百戦殆<sup>あやふ</sup>からず」「戦わずして勝つのが上策」など  
兵法のみにとどまらない合理的人生哲学

#### <名家> ……公孫竜

「白馬は馬にあらず」で有名、詭弁的。

しかし本来は、「言葉(名)」と“実体”の関係を正確に分析するもの。(→ソシュール)